

唐代古文家の「伝」について

谷口 匡

一、はじめに

中国の散文学史上において唐代は画期的な時代である。いわゆる「古文」の文体が確立されていただけではなく、個別のジャンルでも大きな変化があった。そのうち伝記体のジャンルに関しては韓愈（七六八—八二四）が多くの「碑誌」の文を書いて、『史記』の列伝などとはまた異なる様式で人間を描いた。しかしこのジャンルには「伝」と称する比較的少数の文章が存する。それは数量的には「碑誌」の多さに及ばないものの大きな特徴を有するものである。

このジャンルの枠組みに関しては、褚斌傑氏が、①「史伝」と称される史書中の人物伝記、②一般の文人・学者による単独の伝記、③伝記体を用いた虚構の物語で事実上の伝記小説、の三種に分類するのがわかりやすい。唐代の代表的散文家、韓愈や柳宗元（七七三—八一九）が古文で書

いた「伝」は当然、②か③のいずれかに属する。褚氏は韓・柳の「伝」のうち、「圻者王承福伝」「種樹郭橐駝伝」「童区奇伝」「梓人伝」「宋清伝」を②の例とし、「毛穎伝」「蝨蝨伝」を③と見なす。「李赤伝」「劉叟伝」「河間伝」については触れられていないが、これらを虚構ではないと考えるところとまず②と見なしうる。褚氏は③に関しては別に小説の創作として扱うべきであるとして伝記ジャンルから外すが、氏が③に分類した「毛穎伝」「蝨蝨伝」などもその寓意性の強さから言えば、小説よりは伝記に近いのではなからうか。ここではそれらをまとめて古文家の「伝」と考えたい。

さて、韓・柳以前の古文家では李華（七一五—七七四）に二篇の「伝」があるが、いずれも「碑誌」とそう異ならない。それらを別にしてなお一つ残るのが韓愈の「太学生何蕃伝」（以下「何蕃伝」）である。「何蕃伝」は表題から

は太学の学生何蕃の伝記であるように見える。しかしそのジャンルをめぐっては古来さまざまな評論がなされてきた。本稿では「何蕃伝」の「伝」としての特異性を手がかりにして、韓愈と柳宗元に代表される唐代古文家の「伝」の特色を論ずる。

二、「何蕃伝」のジャンルをめぐる諸説

はじめに韓愈の「伝」三篇——「圻者王承福伝」「毛穎伝」「何蕃伝」を後世の総集や選集がどのように収録するかを見てみよう。調査対象としたのは、宋代では①李昉が編集した『文苑英華』一千卷、②姚鉉の『唐文粹』一百卷、③真德秀の『文章正宗』二十四卷、④樓昉の『崇古文訣』三十五卷、明代では⑤唐順之の『文編』六十四卷、⑥茅坤の『唐宋八大家文鈔』一百六十四卷、⑦賀復徵の『文章弁体彙選』七百八十卷、⑧徐師曾の『文体明弁』八十三卷、清代では⑨林雲銘の『韓文起』十卷、⑩吳楚材・吳調侯の『古文觀止』十二卷、⑪沈德潛の『唐宋八家文讀本』三十卷、⑫乾隆帝の『唐宋文醇』五十八卷、⑬姚鼐の『古文辭類纂』七十五卷、⑭曾國藩の『經史百家雜鈔』二十六卷である。三作品を比較すると、「圻者王承福伝」は①③⑤⑨⑬の十一種、「毛穎伝」は①②④⑨⑪⑭の十二種に収める

のに対して、「何蕃伝」を収録するのは③⑤⑦⑨⑪⑫の七種と最も少ない。なかでも①⑧⑬では「何蕃伝」だけが落選している。それらはいずれもジャンルごとに代表的作品を集めた書物だが、「伝」「伝状」といったジャンルとしては「何蕃伝」は相応しくないと判断されたのであろう。

「何蕃伝」は東雅堂本など通行する四十卷本テキストの卷首目録では「雜著・書」という括りのある卷一四に収められる。その配列をみると、「鄆州溪堂詩」「貓相乳」「進士策問十三首」「争臣論」「改葬服議」「省試学生代斎郎議」「禘祫議」「省試顔子不弔過論」「与李秘書論小功不稅書」「太学生何蕃伝」「答張籍書」「重答張籍書」の順である。この場合、「省試顔子不弔過論」までが「雜著」、「与李秘書論小功不稅書」以下が「書」であるとすると、「何蕃伝」は「書」の方に含まれる。李漢によって唐代に編まれた韓愈の文集も、現行のテキストとは編成上の大きな違いはなかったと考えられるが、配列だけからいえば、この文章は元来は「何蕃伝」ではなく「何蕃書」であった可能性がある。一方で李漢の序には「雜著六十五」と見える。卷一一「原道」から卷一四「省試顔子不弔過論」に至る「雜著」の篇数を数えると六十四であって、これに「何蕃伝」を加えると勘定が合うから、李漢は「雜著」と見なしていたと

疑われる。⁽⁴⁾ここに「何蕃伝」のジャンルをめぐる諸説が生まれる。

第一に「書」のジャンルで考える説がある。方崧卿（一一三五—一九四）の『韓集拳正』では「何蕃伝」の表題を「杭本」に従って「何蕃書」に作る。杭本とは北宋の大中祥符二年（一〇〇九）杭州明教寺刊本のことである。『拳正』にはいう、「蜀本では『太学生何蕃伝』に作る。しかし巻首の総題ではやはり『書』に作る。この文は『書』の分類で括られているのだから、古いテキスト（杭本）に従うべきである」と。蜀本は南宋中期のもので、杭本より遅れ、すでに「何蕃伝」という表題に改められていたのである。

「何蕃伝」を「書」として考える説は、方崧卿以後、少なくとも次の二つがある。一つは姚範（清の乾隆の進士）の説で、これは「書後」の類であるが、表題に脱字があるので、何に対する書後かがわからないとする。⁽⁵⁾もう一つは王元啓（乾隆十六年・一七五二進士）の説で、この「書」は書簡の意味ではない「書」であって、事実在即してそのまま記録するのを「書」、生涯にわたる言行を概括するのを「伝」というと定義し、「何蕃伝」の場合は前者だと述べる。⁽⁷⁾

第二の「何蕃伝」を「伝」と見なす説は朱熹（一一三〇—一二〇〇）に始まる。彼は「これは『伝』に作るべきなのに『書』に分類されるのは、よくわからない。文章からいえば全く『伝』である。ましてや諸本の中に『伝』に作るものがあるのだから」と、⁽⁸⁾「書」とする説に疑問を呈する。この朱熹の説は影響力をもったであろうが、清代になると、「伝」としての性格を見定めようとする傾向が現れる。

顧炎武（一六一三—一六八二）は「列伝」は司馬遷が創始したもので歴史書のスタイルであるから、史官の職になれば人のために「伝」を書いてはならぬとする。彼は「太学生何蕃伝」「圻者王承福伝」「毛穎伝」「宋清伝」「種樹郭橐駝伝」「童区寄伝」「梓人伝」「李赤伝」「蝨蝨伝」をあげ、「何蕃伝」が一つの事柄だけで構成して「伝」と言い、王承福の輩はみな身分の低い者であるが「伝」と言い、「毛穎伝」「李赤伝」「蝨蝨伝」などは戯れに作って「伝」と言うのは、「稗官の属」つまり小説の類に準えているとする。⁽⁹⁾

この「伝」は史官の職掌とする考え方は劉大櫟（一六九八—一七七九）を経て、その門人である姚鼐（一七三一—一八一五）にも受け継がれた。姚鼐は秦・漢代から師の劉大櫟に至るまでの模範的散文の選集『古文辭類纂』を編んだ時、韓愈の作品から「圻者王承福伝」「毛穎伝」を「伝

「狀類」に含めながら、「何蕃伝」を落とした。「何蕃伝」は「伝」の標準的作品としては不適当と考えたのであろう。

これらとは別に全祖望（一七〇五—一七五五）は独自に「伝」を六種に分類した。彼の分類ではその人の一生の「一コマを取り上げて全体を示すものを「別伝」とし、「何蕃伝」や蘇軾の「方山子伝」をその例としている。¹⁰⁾

第三に「雑著」と考える説がある。「伝」は史官の書くものとする顧炎武らの論に反対した章学誠（一七三八—一八〇一）は、明の嘉靖以後に文を論ずる者が流派に分かれ、その「好んで高論を為す者」が、「伝」は史官の職掌で、史官でなければ「伝」を書いてはならぬと言ったとする。

これは恐らく顧炎武を指す。そして「伝」は史家が始めたのではなく、司馬遷・班固以前からあったとし、また『文苑英華』のように種々の「伝」をそろもろの正統的な「伝」に分類するよりも、「何蕃伝」を「雑著」に、「毛穎伝」を「雜文」に入れた李漢の分類の方が明快だといふ。¹¹⁾

さらに清の乾隆帝勅撰の『唐宋文醇』においても「何蕃伝」は巻二「雑著」に収められる。もつともここでは「圻者王承福伝」も「雑著」に、「毛穎伝」は「雜文」に入っているから、もともとの李漢の分類に戻した感がある。

以上、「何蕃伝」のジャンルをめぐる諸説をみたが、現

代の説もおおむねこうした旧説の範囲を出ない。¹²⁾ いずれにしてもこれらから「何蕃伝」が「伝」ジャンルの中にとどまりきらない特異性を持つと捉えられてきたことがわかる。

三、「何蕃伝」は「小説」か

上述のごとく顧炎武は「何蕃伝」がわずか一つの事柄の記録だけで「伝」と言っていることを指摘し、韓愈・柳宗元が書いた他の「伝」の作品とともに小説の一種だと述べる。また最近でも人生の一部分に焦点を当てて詳細に描写している点で、伝記体小説の発起点とみなす説があるから、まず「小説」といえるかどうかを検討しよう。

韓愈が小説に類する作品を書いたとする説は陳寅恪の「韓愈と唐代小説」¹³⁾が知られるが、その際、小説とは唐の伝奇小説を指している。しかし、王運熙「試みに唐伝奇と古文運動の關係を論ず」¹⁴⁾では、伝奇が物語の筋を重んじ、きめ細やかで装飾的な文体であるのに対し、古文家の「小説」は寓意を重んじて、文体は素朴で古めかしく、その風格は対立すると指摘する。これらの説でいう「小説」とは、韓愈の場合、「石鼎聯句詩序」「毛穎伝」「圻者王承福伝」といった文章がその例にಾಗಿ、「何蕃伝」は含まれない。一步譲って、人生の一部分に焦点をあてて細部をも詳し

く述べることを「小説」の一条件と考えると、古文家の伝記の中にも「小説」に近いものがある。すなわち人さらいに捕まつて売られようとした牧童が賊を殺して脱出する場面を詳細に描いた「董区奇伝」、狂人の不可解な行動を一つ記した「李赤伝」、貞淑な一婦人が淫婦に墮落していく過程をつづる「河間伝」なども「小説」と見なせる。しかしこれらにはいずれも「柳先生曰」で始まる訓戒があり、ただ話の面白さを伝えようとしたのではなく寓意があった。

このような「伝」を書いた一人には、韓愈の門下生の沈亜之（七八一？―八三二？）がいる。沈亜之も韓愈に学んで古文の文体で四篇の「伝」と題する作品を残した。そのうち、李紳についての伝記「李紳伝」について見ると、一つの事件に注目し、そこを集中的に描く手法が見られる。

たとえば、節度使の李錡のもとで書記官を務めていた李紳が反乱の檄文を書かされそうになる場面は次のようである。

李錡はますます怒り、急いで李紳を呼んで紙と筆を渡し、反乱の檄文を書かせて上奏しようとした。李紳は李錡の前に座ると、恐怖でおののいている様子を装った。

筆は揺れて紙は落ち、札は字をなさず、そのたびに塗りつぶされた。数十行進んでも、その繰り返しで、ほとんど紙がなくなつてしまつた。⁽¹⁶⁾

唐朝への反逆に手を貸すことも、時の節度使にはむかうこともできない李紳が、必死の演技でこわくて書けないふりをするこの場面は『新唐書』巻一八一李紳伝でも書かれているが、⁽¹⁷⁾『新唐書』は沈亜之の「李紳伝」を下敷きにしたように見えて、「ますます怒り」（益怒）、「筆は揺れて紙は落ち」（管揺紙下）といった、緊迫した場面を細かく描写した箇所はそぎ落とされているのである。内山知也氏は、沈亜之の「李紳伝」を評して「史伝を意図しつつも、一面、異聞を記録する小説的なものへ傾斜していることを示している」と述べる。⁽¹⁸⁾ 沈亜之の書く「伝」はこうした小説化の傾向が強く、人妻と密会したあげくにその女を殺す男について書いた「馮燕伝」などは話の展開を劇的に描こうとしている点において、伝奇小説に近づく。またやはり韓門の一人である李翱（七七一―八三六）も、ある県令の妻が、淮寧節度使李希烈の率いる反乱軍が城下に迫った時、果敢に夫や人民を励まして賊を退けたさまを「楊烈婦伝」に記した。これら一連の「伝」はいずれも文末に「贊」を付して作者の感慨を記すから、なお「史伝」のにおいを残すが、事件の一部始終を述べることに精力を集中している点では「小説」の領域にも一歩足を踏み入れているといえよう。

「何蕃伝」ではどうか。この作品は大きく四つの段落に

分けられる。第一段は冒頭から「以是無成功」までの一二六字で、進士に合格できない何蕃の現状、第二段は「蕃、淮南人」から「不果留」までの一二七字で、何蕃に関する一連の事件、第三段は「歐陽詹生言曰」から「茲非其勇歟」までの一〇七字で、何蕃の評価をめぐる問答、第四段は「惜乎蕃之居下」から末尾までの一二三字で、何蕃に対する韓愈の感慨が述べられる。その中で明らかに伝記と意識して書かれている部分はどこであろうか。

それを特定する際に、冒頭の一文が重要な判断材料になる。一般的に「伝」のジャンルの文の冒頭は、正史などの「史伝」に倣って、その姓名、出身地などから書き出すことがしばしばある。韓・柳の「伝」においても「毛穎伝」「宋清伝」などがそうである。冒頭でなく、途中から伝記が始まる場合も同様で、「董区奇伝」で「少年の奇は柳州の柴刈りと牛飼いに従事する子どもである」（董奇者、柳州薨牧兒也）と記して伝記を始めるのはその例であろう。

「何蕃伝」では第二段の冒頭に「蕃は淮南の人である」（蕃、淮南人）の一文があるから、伝記的記述はそこから始まると見なせる。そこでは何蕃が退学を決意するまでの過程とそれを知った諸生の行動が次のように書かれる。

蕃は淮南の人である。両親はいずれも健在である。彼

が太学に入學したばかりの時、毎年に必ず一度は帰省していた。両親はそれをやめさせた。その後は一、二年をあけて一度帰省した。またそれをやめさせた。よって帰省しなくなつて五年になる。何蕃は孝行な人である。両親が年老いたのを悲しむ気持ちを抑えきれず、ある日、学生たちに別れを告げて親の面倒を見に和州に帰ろうとした。学生たちは何蕃を思いとどまらせることができず、そこで彼を空き部屋に閉じ込めた。

何蕃の伝は『旧唐書』には見えない。しかし『新唐書』卷一九四卓行伝における陽城伝の附伝には短いがその伝記が記される。韓愈と『新唐書』の両「何蕃伝」を比較すると、出身を「淮南」（韓愈）とするか「和州」（『新唐書』）とするかの違いを除き、『新唐書』はほぼ全面的に韓愈に依拠している。今、その部分を原文で示すと、韓愈では、

初入太学、歳率一帰、父母止之。其後間一二歳乃一帰、又止之。不歸者五歳矣。蕃、純孝人也。閔親之老、不自克、一日、揖諸生、歸養于和州、諸生不能止、乃閉蕃空舍中。

であり、一方、『新唐書』では、

学太学、歳一帰、父母不許。間二歳乃帰、復不許。凡五歳、慨然以親且老、不自安、揖諸生去、乃共閉蕃空舍

中。

である。全体として短くなっているが、大きな書き替えはなく、「歳率一帰」と「歳一帰」、「間一二歳乃一帰」と「間二歳乃帰」、「乃閉蕃空舍中」と「乃共閉蕃空舍中」のような類似した表現が目立つ。「蕃、純孝人也」のように正史の記述として不要なものが省かれている部分はあるものの、逆に新たに付け加えられたところは殆どなく、明らかに『新唐書』は韓愈の「何蕃伝」を骨格として書かれている。

「何蕃伝」は、帰省しようとする何蕃を空舍に閉じ込める場面が唯一事件といえる部分だが、特に脚色を加えた描き方はなされず、事実をそのまま書き留めた色彩が強い。こうした点から考えると「何蕃伝」を「小説」と見なすことは困難である。

四、問答による人物評価と主題

「何蕃伝」が「小説」でないとすれば、標準的な古文家の「伝」といえるのだろうか。

韓・柳のこの領域の文では、しばしば問答形式で伝記中の人物の評価が明らかにされる。柳宗元の「宋清伝」は、宋清という薬売りの伝記であるが、宋清が薬を求めに来た者には、お金がなくても証文一つできつと与え、年末にな

って払えないことがわかると証文を焼き捨ててとやかく言わない、といったことが書かれる。宋清のこうした行為について、柳宗元は問答を用いて次のように述べる。

商人たちはそれを不思議に思つて、みな笑い、「清は愚かで常軌を逸した奴だ」と言つた。ある人が「清は徳のある人だろうか」と言つた。清はこれを聞いて「私は利益を求めて妻子を養っているだけで、徳があるわけではない。しかし私を愚かで常軌を逸しているというの間違つている」と答えた。¹⁹⁾

ここでは、宋清に対する否定的評価をまずあげて、問答の中でそれを改めて否定し、人間の行為としてどのような位置づけられるかをはつきりさせようとする。これらは一見、両者の問答のようであるが、問答の形式を借りた作者の意見表明である。いいかえれば人物の行為や発言を記述した「叙事」のように見えながら、実は作者の意見や感慨を記した「議論」になっている。そして決して特別に優れた人物として宋清に最上の評価を与えるのではなく、人間としてごく当然のことをしているだけだが、その中に見るべき価値があるという描き方をしている。

「植樹郭橐駝伝」では「叙事」と「議論」がまじつて出てくる。植木屋郭橐駝は病気で背中の肉が盛り上がり、

「囊駝」の名で呼ばれているが、木を育てる術にたけており、長安の金持ちのみならず彼に依頼する。その秘訣がある人が問うと、彼はただ木の持つている本性に逆らわないようにしているだけだという。さらにこれを人民を治める方法に引用できないか、と問うと、郭囊駝は役人から仕事するよう厳しくせきたてられた結果、かえって病み疲れている人々のありさまを述べ、植物によいけいな手を加えて枯らししているのと同じだとする。これらはやはり郭囊駝の言葉を通して柳宗元自身の見解を述べたものである。そして、このあとに柳宗元は次のように書いている。

問う者は言った、「ああすばらしいことだ。私は木を育てる方法を尋ねて、人民を養う術を得た」。私はそのことを伝えて役人への戒めにしよう。²⁰

柳宗元は郭囊駝を描くことで、彼が実践する仕事の方法が、もつと大きな真理にも繋がっていることを述べる。彼が本名ではなく「囊駝」というあだ名で呼ばれるのはその植木の技術にも拘らず、奇妙な外見によつて世間的にはそれほど尊敬を受けていなかったことを意味しよう。しかしそこに柳宗元は技術以上の優れた価値を見出したのである。「梓人伝」においては、楊潜という大工の親方が家に道具も置かず、寝台の脚さえも修理できないようすであるの

を作者柳宗元は見えて笑い、能力がないのに俸給を食う者と一旦は思い込む。しかし大勢の大工を見事に指図する彼の仕事ぶりを見て次のように言う。

ついで私はため息をついて言った、「彼はあるいは自分の技を捨て去り、もっぱら頭を働かして物事の主要をつかんでいる人ではないか。心を用いる人は人を使い、力を用いる人は人に使われると私は聞いているが、彼は心を用いる人ではないか。技能のある人が腕をふるい、知恵のある人が策を施すなら、彼は知恵のある人ではないか。これは天子を輔佐し、天下を治める人の規範とすらに足るものだ。これ以上似ている二つの物はない」。²¹

この作品は問答の連続で成り立っているものではないが、最も述べたい部分は文中の自分に言わせている。そして作者が感心した棟梁が一人では普通の大工以下の腕前しかないように描かれている点にも注意したい。

このように柳宗元の「伝」では、儲けを度外視した葉売り、背中の曲がった植木屋、簡単な修理すらできない大工といった世間的な価値からはずれる人々をとりあげ、彼らの真の価値を発見するのであるが、それは問答の形式、すなわち作者を含む登場人物の発言の中で明らかにされる。それは韓愈の「圜者王承福伝」でも同様であつて、左官王

承福の口を通して次のような現実を述べる部分がある。

ああ、私はこてを片手に貴人の家を回るようになって、もうかなりの年数になる。そのうち、一度行ったことのある家が、再び通りかかってみると廢墟になつてゐる。二度三度と行った家が、それからまた通りかかってみると廢墟となつてゐる。このことを隣家の人に問えば、ある者は言う、「ああ、あの人は刑によつて殺されました」と。ある人は言う、「その人自身はもう死んで、子孫も保有することができなくなりました」と。ある者は言う、「持ち主は死んでお上の所有に歸したのです」と。

以上から考えると、彼らはいわゆる、その仕事で飯にありつきながら努力を怠り、天の災いを受けた者ではないだろうか。それは、頭を働かす仕事を無理にもくろんで才知が及ばず、自分の才能の向き不向きを考えずにしてしまつた結果ではないだろうか。恥ずべき行為を数々行い、いけないことだと知りながら敢えてし続けた結果ではないだろうか。富貴は長続きしにくいものなのに、僅かの功績で過分の報酬を受けた結果ではないだろうか。そもそも人生の盛衰は時の運に左右され、それは近づいたり遠のいたりして一定しないということではないだろうか。私はそれを憐れなことに感じる。よつてわが能力

の及ぶところを択んで行ふのである。富貴を好み、貧賤を悲しむ点で、私はどうして人と異なるだろうか。⁽²²⁾

この部分はすべて王承福の發言であつて、韓愈の意見を直接述べてはいない。その意味では全体が王承福に関する伝記の一部であり、「叙事」といえよう。しかし、發言の前半が王承福の眼で盛衰の移り変わりの激しい当時の現実を記述するのに対し、後半の「以上から考えると」（吾以是觀之）以下はそれに対する感慨であつて、韓愈自身の意見が投影している。その次元で考えるなら、前半は「叙事」だが、後半は「議論」であり、李塗『文章精義』が「叙事」と議論とがかわるがわる書かれる」と指摘する通りである。⁽²³⁾ところで「圻者王承福伝」における「議論」は、富貴な人々の生き方に対して疑問を投げかけ、自分自身がなぜ左官の仕事に満足しているかを説明している。その意味ではこの「伝」の冒頭に、「左官の技術は、卑しくてしんどいものである。これを職業としていながら満足げな様子をしている者がいた。彼の話を聞くと、簡にして要を得ている」（圻之為技、賤且勞者也。有業之其色若自得者。聽其言、約而尽）とあるのとも繋がり、「伝」としての一貫性を保っている。つまり王承福の言葉に示される彼の生き方そのものがこの「伝」における一貫した主題となつてゐる。

他の「伝」でも同様であつて、それぞれの主題は登場人物の行為をめぐる議論の中に存する。それを記述すること、そのようにできない当時の人々を批判することになる。「何蕃伝」では第三段で歐陽詹とある人との問答を通して、朱泚の乱における何蕃の行動を明らかにしている。

歐陽詹君は言う、「何蕃は仁愛と勇氣をもった人である」と。するとある人は「何蕃が太学にいると、学生たちはよくない行動を慎んだ。身寄りのない死者を葬つてやり、その孤児を哀れんで養つた。他人の恩恵を受けると、大小に関わらず、きつとできる限りのことをして報いた。これはあなたが言う仁ではなからうか。みたところ何蕃は身体を支えられるだけの力もなく、その遠大な志に似つかわしくない容姿である。私は彼にどんな勇氣があるかわからない」と言つた。歐陽詹君は「朱泚が反乱を起こすと、太学の学生たちはこぞつて朱泚に追隨しようとし、何蕃にも加わるように求めた。何蕃は真顔になつて彼らを叱責した。六館の学生が反乱に追隨しなかつたのは、彼の勇氣によるのではないか」と答えた。²⁴

ここではまず歐陽詹の「何蕃は仁愛と勇氣をもった人だ」という評価をあげる。それに対してある人が「仁愛をもつことは認めるが、勇氣については不明だ」と反対意見

を述べる。すると歐陽詹は、朱泚の乱における何蕃の毅然とした姿勢を述べて勇氣をもっていることを証明する。このように見ると、「何蕃伝」における何蕃の評価は宋清、王承福、郭囊駝などとは明らかに違つており、作者がストレートに肯定的評価を与えるものとなつてゐる。

『新唐書』何蕃伝はこの部分から何蕃が身寄りのない死者を葬つたことや朱泚の乱における毅然とした態度などの伝記的事実をうまくすくいとつてゐる。²⁵ さきの第二段ともこの第三段も『新唐書』に引かれていることは、今述べてきた人物評価とも関わる。『旧唐書』には何蕃の伝はなく、『新唐書』のみに現れる。しかもそれは韓愈の「何蕃伝」にほぼよつてゐる。これは清の趙翼がいうように、『新唐書』の撰者である歐陽修・宋祁が韓・柳の古文を好み、「何蕃伝」をとりこんだ可能性もある。²⁶ しかし、何蕃が全く無名の人物ならそれはありえなかつた。少なくとも何蕃には正史の列伝に載るほどの社会的名声があり、宋清、郭囊駝、楊潜、王承福らが全くの市井の人々だったのとは異なる。何蕃に対する人物評価が特異であるのはそうした要因もあろう。

そして韓愈が、何蕃の伝記とは別に文中で述べたかつた事柄は最後の第四段にはつきり現れてゐる。ここで韓愈は

何蕃の「仁義の道」が、地位が低いために万人に施されな
いのを惜しんでいる。そのことを述べるために、水の喩え
を用い、沼と川でいえば何蕃の場合は沼であつて、川のよ
うに流れていかないうから、その「仁義の道」が広範囲に行
われないのだ、という。そして次のように述べて文を結ぶ。

よつて貧しく地位の低い者が必ずしかるべき時期を待
つて、そのあとに初めて大きな事業を成し遂げることが
できるのは、どうして何蕃一人だけのことであろうか。

以上のようなわけで私は何蕃のことを述べて、彼の事績
が伝わらないままに終わらぬようにするのである。⁽²⁷⁾

すなわち、「何蕃伝」の主題は、何蕃の行いの中に、何
か普遍の真理を見出して、それを伝えるという点にはな
かつた。また何蕃の行為や事件の劇的瞬間をとらえて小説的
に書き留めることにしない。何蕃のような逸材がいつま
でも世に用いられずに終わつてゐる、当時の人材登用制度の
不合理を訴えようとしてゐるのである。⁽²⁸⁾

したがつて冒頭の第一段で、何蕃が学識人格ともに立派
であるのに、つてがないためになかなか進士に合格できな
いことを記したのは、何蕃の伝記として書かれたものではな
い。現行の科挙制度での何蕃の不遇な現状を述べて、第四
段で述べる主題と呼応させてゐるのである。

このように「何蕃伝」は何蕃について書きながらも、そ
の主題は何蕃の生き方自体にあつたわけではなかつた。

五、むすび

唐代では史官でなければ一般に「伝」を書かなかつたが、
無名の人物に対して史伝とは別の寓意をもつた「伝」が書
かれることがあつた。韓・柳の作品では「圻者王承福伝」
「種樹郭橐駝伝」「梓人伝」「宋清伝」などがその典型である。
さらにより事件の描写に傾き、小説性を強めたものとして
「童区奇伝」「李赤伝」「河間伝」などがある。また全くの
虚構によるものでは「毛穎伝」「蝨蝦伝」があげられる。

「何蕃伝」は対象の人物が必ずしも無名ではないこと、
人物に対して全面的に肯定的な評価を行うこと、主題がそ
の人物の人格や行為から発するものではないこと、事件の
細部の描写には乏しいことなど、唐代の一般的な「伝」ジ
ヤンルの特色からはみ出す面があつた。しかし一方で伝記
的色彩も有していたために、作品の本来の性格とは別に
「伝」というジャンルに固定していったと考えられる。

「何蕃伝」は通説では徐州の張建封に招かれて補佐官と
なつてゐた韓愈が上京し、歐陽詹と接触した貞元十五年
(七九九年)の冬、三十二歳の作とされる。「圻者王承福伝」

「毛穎伝」の制作年ははっきりしないが、近年の屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』（四川大学出版社、一九九六年）の編年ではそれぞれ貞元十七年（八〇一）と元和二年（八〇七）とする。この中では柳宗元が同類の作品を書いたことでわかるように「圻者王承福伝」が標準的な「伝」といえ、最も寓意性が強い。一方で柳宗元にはより小説的な「伝」があり、韓門の弟子たちはむしろそうした傾向の作品を書いた。韓愈の時代にはまだ「伝」ジャンルの形式はそれほど固定したものではなかったと思われる。それゆえ「毛穎伝」のような戯れの作品に対しては賛否両論が寄せられたが、それでも彼はこれを「伝」として書くことができた。

年代的に最も早い「何蕃伝」は、「伝」の形式が定まる前に書かれたとすれば、これが特異な「伝」になったのはやむを得ぬことであった。同じく異端の「伝」であった「毛穎伝」が今では韓愈の代表作の一つとしての地位を得ていることを考えると、「何蕃伝」は結果的に自身の二つの「伝」に凌駕されたともいえる。しかし三篇の「伝」がすべて型を異にし、それぞれの方向を模索していることは韓愈の散文文学の可能性を示すものとして注目に値しよう。

注

- (1) 褚斌傑『中国古代文体概論（増訂本）』（北京大学出版社、一九九〇年）四二〇頁、また福井佳夫訳『中国の文章——ジャンルによる文学史』（汲古書院、二〇〇四年）二二九頁。
- (2) 韓愈には「圻者王承福伝」（『昌黎先生集』巻一二）、「太学生何蕃伝」（同巻一四）、「下邳侯革華伝」（『毛穎伝』（以上同巻三六））、柳宗元には「宋清伝」（『種樹郭橐駝伝』）、「董区奇伝」（『梓人伝』）、「李赤伝」（『蝸蟻伝』）、「曹文治韋道安伝」（以上『河東先生集』巻一七）、「劉叟伝」（『河間伝』）（以上同外集巻上）がある。なお「下邳侯革華伝」は後世の偽作と疑う説があり、「曹文治韋道安伝」は本文を欠くため、考察対象より外した。
- (3) 拙論「虫の伝記——柳宗元『蝸蟻の伝』を読む」（『数研国語通信つれづれ』第八号、二〇〇六年）参照。
- (4) 李漢の編んだテキストに関しては、拙論「韓愈『鱷魚文』の位置」（『中国文化』第六三号、二〇〇五年）参照。
- (5) 蜀本作太学生何蕃伝。然巻首総題亦作書。此文総於書類、当従旧本。（『韓集孝正』巻五）
- (6) 太学生何蕃伝、此疑書後之類。但題有脱字、不知所書者為何耳。（『援鶴堂筆記』巻四二）
- (7) 篇題書字、……非謂簡牘問答之書。……書与伝、体不同、擬事直書、謂之書、統紀畢生言行、謂之伝。此文……皆書事体、非伝体。（『説韓記疑』巻五）
- (8) 此当作伝而入書類、未詳其説。但其詞則実伝也。況有

諸本可從乎。(『昌黎先生集考異』卷五)

- (9) 『日知錄』卷一九・古人不為人立伝。唐・宋以後、史官でない諸家が「伝」を書く場合にある種の制限があつたことは、小川環樹『五柳先生伝』と『方山子伝』(小川環樹著作集『第三卷所収』)参照。

- (10) 『結埼亭集外編』卷四七「答沈東甫徵君文体雜問」。

- (11) 『文史通義』内篇三・伝記。

- (12) 何蕃の推薦書の意味で「書」とする説(董第徳『韓愈文選』人民文学出版社、一九八〇年)、「書」でも「伝」でも可とする説(錢伯城『韓愈文集導読』巴蜀書社、一九九三年)、「伝」が正しいとする説(霍松林・霍有明『新選新注・唐宋八大家書系 韓愈卷』中国工人出版社、一九九七年)などがある。

- (13) 王桂「韓愈『何蕃伝』の創作意図について」(『大東文化大学中国学論集』十四号、一九九六年)。

- (14) 程会昌訳、『韓柳文学研究叢刊 韓愈論評』(竜門書店、一九九九年)所収。

- (15) 『漢魏六朝唐代文学論叢』(上海古籍出版社、一九八一年)所収。

- (16) 錡益怒、急召紳授紙筆、令操書上牘、紳坐錡前、佯惴怖戰。管搖紙下、札皆不能字、輒塗去。累數十行、又如是、幾尽紙。(『沈下賢文集』卷四)

- (17) 錡召紳作疏、坐錡前、紳陽怖栗、至不能為字、下筆輒塗去、尽数紙。

- (18) 『隋唐小説研究』(木耳社、一九七七年)五〇八頁。なお本稿でとりあげない「郭常伝」「喜子伝」も含めた四篇の「伝」については同書に詳しい。

- (19) 市人以其異、皆笑之、曰、清、蚩妄人也。或曰、清其有道者歟。清聞之曰、清逐利以活妻子耳、非有道也、然謂我蚩妄者亦謬。

- (20) 問者曰、噓、不亦善夫。吾聞養樹、得養人術。伝其事以為官戒。

- (21) 繼而嘆曰、彼將捨其手芸、專其心智、而能知体要者歟。吾聞勞心者役人、勞力者役於人、彼其勞心者歟。能用而智者謀、彼其智者歟。是足為佐天子相天下法矣。

- (22) 噓、吾操鋤以入貴富之家有年矣、有一至者焉、又往過之、則為墟矣。有再至三至者焉、而往過之、則為墟矣。問之其隣、或曰、噫、刑戮也。或曰、身既死、而其子孫不能有也。或曰、死而歸之官也。吾以是觀之、非所謂食焉怠其事而得天殃者邪。非強心以智而不足、不挾其才之称吾而冒之者邪。非多行可愧、知其不可而強為之者邪。將貴富難守、薄功而厚饗之者邪。抑豐悴有時、一去一來而不可常者邪。吾之心憫焉、是故挾其力之可能者行焉。衆富貴而悲貧賤、我豈異於人哉。
- (23) 伝体前叙事、後議論。独退之圻者王承福伝、叙事議論相間、頗有太史公伯夷伝之風。

- (24) 歐陽詹生言曰、蕃、仁勇人也。或者曰、蕃居太学、諸生不為非義、葬死者之無歸、哀其孤而字焉、惠之大小必以力復、斯其所謂仁歟。蕃之力不任其体、其貌不任其心、吾

不知其勇也。歐陽詹生曰、朱泚之乱、太学諸生拳將從之、來請起蕃、蕃正色叱之、六館之士不從乱、茲非其勇歟。

(25) 初、朱泚反、諸生將從乱、蕃正色叱不聽、故六館士無受汙者。蕃居太学二十年、有死喪無婦者、皆身為治喪。

(26) 前掲拙論「韓愈『鱷魚文』の位置」参照。

(27) 故凡貧賤之士必有待然後有所立、独何蕃歟。吾是以言之、無亦使其無伝焉。

(28) 王桂氏前掲論文でも「何蕃伝」は「一人の成功しなかった太学生に託して、太学制度を痛撃した作品である」と述べる。

(29) その議論は柳宗元「読韓愈所著毛穎伝後題」(『河東先生集』巻二二)に見える。

(京都教育大学)